OPINION
オピニオン・スライス
SLICE

インタビュー日
2021年（令和3年）3月8日（月）

日本プロゴルフ協会会長 倉本昌弘さん

ゴルフとの出会い

―― 倉本昌弘会長はレギュラーツアー30勝で学士プロ初の永久シード選手、レジェンドです。また、現役選手としてシニアツアーでプレーされながら、PGA（日本プロゴルフ協会）の会長として大変お忙しい状況だと思います。本日は大阪までお越しいただき、ありがとうございます。

まず、倉本会長とゴルフとの出会いについてお伺いしたいのですが、子どもの頃は少し身体が弱かったとお聞きしました。

そうですね。体が弱かったので剣道とか柔道とかいろいろやらされました。ゴルフは外でやりますし、誰かに何かを言われてやるわけではないのでゴルフが好きになったという感じです。

―― 最近は、小学校に入る前後からゴルフを始めるジュニアプレーヤーも多いですが、会長はいくつぐらいからゴルフを始められたんですか。

10歳、小学校５年生ぐらいですかね。父に連れていってもらってやり始めたのがきっかけです。

―― 10代で広島ゴルフ倶楽部という名門ゴルフ場でチャンピオンになられたんですね。

中学３年のときにクラブチャンピオンになっています。

憧れのゴルファーは

―― 倉本会長は目標とされる、憧れのゴルファーはおられたんですか。

私の憧れは中部銀次郎です。子どもの頃は、プロよりも同じアマチュアの方に憧れたというほうが大きかったです。

―― 中部さんは、大洋漁業グループ（現 マルハニチロ）の御曹司ですね。

はい。甲南大学出身のトップアマですね。50年、60年前は関西のほうがゴルフは発展している状況でした。ゴルフが日本に入ってきて今でちょうど120年ぐらい経つのですが、ゴルフ場が最初にできたのが六甲山（神戸ゴルフ倶楽部）、その後に神戸の競馬場

のところにできたり、大阪、横浜にできたりと、結局、外国人がたくさんいるところにゴルフ場ができたということですね。長崎にも外国人がたくさんいたので、その避暑地でもある雲仙にもゴルフ場ができました。

―― 中部さんは我々にとっては伝説の方ですが、会長は中部さんと一緒にラウンドされたことはあるんですか。

もちろんあります。日本代表でも一緒にプレーしています。当時はプロになるのが全てではなくて、仕事を持ってゴルフをやって、そこで日本一になっていくというのが我々にとっての憧れだったので、ゴルフを職業にするという意識は毛頭なかったです。

プロゴルファーになったきっかけ

―― 会長は、大学時代は日本学生選手権4連覇、それから日本アマ・関東アマというアマチュアのタイトルを総なめにされていますが、プロゴルファーになろうと思われたのは幾つのころですか。

24歳のときで、大学を出て社会人になってからです。アマチュアでプロの試合（中四国オープン）に出て優勝したんです。そのときは広島で家業（料亭）を継いでいたものですから、優勝したその晩に家に帰ると、「勝ったらしいね」とお客さんから言われて、「ありがとうございます」と言ったら、「まあ、親のすねかじりだから、そりゃ強くなるよね」と言われてかちんと来て、冗談じゃないというのがあってプロになったんです。

―― 会長がプロになられてすぐに、和歌山オープンで優勝されましたね。

81年ですね。ルーキーとして年間6勝しました。

―― トップアマから、あっという間にトッププロになられたわけですが、プロになられて大変なところもあったのではないですか。

いや、余りないんじゃないですか。強い者は強い者の中に入ってしまうと、より強くなれるので、非常に楽なんです。一旦トッププロになると、自分で駄目になって落ちていかない限りはずっとトップでいられるんです。当然稼ぎが多いから自分にお金をかけることができるけれども、稼ぎの少ない人は自分にお金をかけられない。コーチもつけられない、キャディーもつけられない、トレーニングもちゃんとできない、おいしいものも食べられない。そうすると、どんどん駄目になっていく。強い人には、一流のコーチがついて、一流のトレーナーがついて、一流のキャディーがついて、マネジャーがついて、となるから、より充実した練習に励めるわけです。だから、どんどん差がついてくるんです。

トレーニングについて

―― 今トレーニングのお話がでましたけれども、倉本会長のイメージは、片手で懸垂をされて、筋骨隆々という感じですが、トレーニングは結構早くからされていたんですか。

はい。私は高校時代からです。高校生のときは体も小さかったし、大きな人に勝つには何か特別なことをやらないと、ということでやり始めました。プロになってからは、トレーニングは自分の体を守ることと鍛えることの両方があるのでやっていました。

―― トレーニングをすると、飛距離とか柔軟性はかなり出てくるものですか。

やり方だと思います。全然駄目になる人もいます。野球選手もそうですよね。トレーニングして逆に飛距離が出なくなったり、ピッチャーだと球速が出なくなったり、というのもありますよね。

―― たしかに筋肉がついてかえって駄目になったという人はたくさんいますね。倉本会長は、良い指導者に恵まれたということでしょうか。

良い指導者というか、自分のやりたいことをちゃんと伝えて、その人に知識があれば教えてもらいます。こちらからこんなことをしたい、あんなことをしたい、じゃあどうすればいいんだといって教わってきました。

PGA会長として

―― 倉本会長はPGA（日本プロゴルフ協会）の会長として4期目ですが、これからのゴルフ界についての抱負をお聞かせいただけますか。

私が会長になった一番の大きな理由は、会員・理事と反社会的勢力との交際問題がきっかけです。当時、PGAは、公益認定等委員会から勧告を受けました。最初の１期は、反社会的勢力排除へ対応することで精いっぱいで、２年間、本当に多大な時間と労力を使いました。全国の会員のところを回りながらいろいろ活動をしてきて、ほぼほぼゼロにできたと思っています。しかし、地下に潜っている人たちがいなくなったわけではなく、こんなご時世、生活が苦しくなってくると、同様の問題が生じやすくなります。コンプライアンスの問題というのは非常に大きく我々にのしかかってきていますし、これからもずっとのしかかってくるのだろうなと思います。会員一人一人がちゃんとモラル・自覚を持って、コンプライアンス意識の高いゴルファーを育てていくことが重要です。

コンプライアンスの問題が少しでも出てくると、結局どんなに努力しても全てが無駄になってしまうというところがあります。ですから、そこの部分はかなり気をつけていかないと、誰も信用してくれなくなってきます。

コンプライアンスに終わりはないといつも言い続けています。

―― PGAに所属しているのは、男子プロだけでしょうか。

今は女子もいます。PGAの定款上、男女の区別はありません。今度入ってくる方も含めると女性会員は８人になります。会員は約5,650人います。

―― PGAの会員の方はレッスンプロが多いと思うのですが、コロナ禍でレッスンが減って生活は結構大変だという方もおられるでしょうね。

大変だと思います。うつると練習場で雇ってもらえないとかいろいろなことがあって、いろいろ気をつけながらやっているというのが現状でしょうね。あと、ゴルフの練習に来るゴルファーは増えていますけれども、レッスンは受けたくないとか、マンツーマンならいいけれども、スクールみたいなもので３人、５人がまとまってやるのは嫌だという方も結構います。

―― それに対してPGAとして何かできることはあるんでしょうか。

ガイドラインをつくって、このガイドラインを守ってやりましょうというのはあります。ただ、基本的には弁護士会と一緒で、会員は個人事業主なんですよ。ですので、PGAとしてできることには限界もあります。

―― PGAとしてプロのトーナメントをやっているのは日本プロゴルフ選手権ですか。

そうです。あと、プロのシニアの試合です。シニアは全部PGAです。今年は観客有りでやる予定ですので、是非お越しください。

プロにとってギャラリーの効用は

―― プロからすると、ギャラリーがいる場合といない場合ではいかがですか。

ギャラリーはもちろんいてくれた方がいいですよ。いないと、勝つべくして勝つ人がなかなか勝たないんです。我々は「見られてなんぼ」の世界なので、見られて実力以上のものを出す人と、見られてプレッシャーで駄目になる人もいますけれども、ギャラリーがいないと、誰も見ていないので、プレッシャーに弱い人も伸び伸びプレーできちゃうんです。

―― 会長は、やはり見られてどんどんやる気が出るタイプですか。

ずっと見られてきているのでそうだと思います。多くのトッププロはみんなそうじゃないですか。

―― 観客の目はプレッシャーにはならないですか。

観客がすごい大声援を送ってくれるとか、すごいショットを打ったらすごい拍手をしてくれるというほうに生きがいを感じるというか、そっちのほうが大きいです。だから、観客がいたほうがいいプレーができるわけです。

―― ところで、プロ同士でラウンドされているときも、この人は今こんな状態だなとか観察しておられるのですか。

いや、ほとんどないです。一緒に回っている彼と戦っているわけではなく、ほかの人たちとも戦っているので。もちろん最後の最後、1対1で優勝争いをしていれば別ですけれども、それでも相手がどう思っているかなんてどうでもいいですよね。自分が1つでもいいスコアを出せるように、と思うことのほうが多いです。

ゴルフの楽しさ

―― ゴルフってこんなに楽しいよというメッセージを読者にお願いします。

ゴルフがほかのスポーツに比べていいところは、例えば歩くことによって少なくとも健康になっていきますから、成人病対策としてゴルフは非常にいいんですね。もうひとつ、外を歩くことで、今のコロナ禍でも感染リスクは非常に低いです。カートに乗っているときも野外の開放的な空間ですから感染リスクはそんなに高くないです。それから、2世代、3世代でできますし、もちろん奥さんともできる、お子さんともできる。お年寄りも若い人も関係なくできるのがゴルフです。

あと、皆さん弁護士さんにとってもゴルフは非常にいいかなと思うのは、相手の性格が見えてきます。短時間しか会わないと猫をかぶれるかもしれませんが、個人スポーツであるゴルフは、プレーを続けていくとどうしても性格が出てくるんです。それをちゃんと見極めることができる、そういう意味では、クライアントと一緒にゴルフに行くと、相手にも見透かされますけれども、自分も相手を見ることができます。そういう意味では、非常に面白いスポーツかなと思います。

しかも、否応なしに3時間、4時間一緒にいなきゃいけないので、そうすると全く会話無しではいられないんです。例えば年上の方と3時間、4時間一緒にいると、年上の方が望んでいる会話をしなければいけない。年下とも協調性を持って会話をしなければいけない。そうすると、いろいろなことが勉強できますね。

―― 私は、学生時代、サッカーにはまっていましたが、サッカーをやっていると、試合中も休憩中も、サッカーの話に夢中になってしまって、それ以外の話はしないことが多かった気がします。ゴルフの場合はゴルフ以外の多様な能力も求められるのかなと思います。

そうですね。結局、ゴルフの話だけだと続かないんですよ。すごくうまい人がいれば、その人にいろいろなことを聞いていけば続くんですが、そうでなければゴルフの話だけではなかなか続きません。でも、ゴルフをやりながら、「どうですか、会社」と話を向けると、「いやあね、表向きはいいんだけど、こういう問題があって」という話が出てくる。ゴルフだからこそしゃべってくれるというところがありますよね。あと、人に聞かれたくない話もゴルフだとできます。例えば弁護士の方の仕事で言えば、「ちょっと先生、ゴルフ行こうよ」と言ってゴルフに行って、「実は、会社では言えないんだけどさ、こんなことがあって、こういう問題があるんだけど、先生、どう思う？どう対処すればいい？」というものとかね。ビジネスだから本来はビジネスの場でやればいいんですよ。だけど、そこだと改まってなかなかしゃべれないけれども、ゴルフをやりながらだと、「こう思うんだけど、先生、どうかね。この裁判やったら勝てるかな」とか、弁護士の方も「いやいや、やめたほうがいいんじゃないですか」と。ビジネスの場であれば、仕事ですから、「やりましょう」ってなる場合もあるでしょうけれども、ゴルフでは「いやあ、正直言ってやめたほうがいいですよ」という本音が出ます。

―― そうですね、ラウンド中は時間がたくさんありますから。話そうかな、どうしようかなというぐらいの話とか、その周辺の事情といいますか、そのあたりのところまで聞くことができたりするということが大いにあるかなということは感じます。

気を許すというか、長時間一緒にいるのでそういうのってありますよね。つい本音が出るとかね。ビジネスツールとしては非常にいいと思います。

おすすめの練習方法

―― ゴルフを始めたい人、もっとうまくなりたい人に対して、アドバイスをいただけますか。

練習ラウンドをする際にできるだけスコアをつけないでやってはどうでしょうか。なぜかというと、ワンショッ

ト、ワンショットのスコアをつけてやると、いろんなことを試すことができないんです。ゴルフは自分で物を考えて自分で調整をして組み立てていくスポーツなので、クリエイティブさがあればあるほどいいプレーができるんです。でも、1個のボールをずっと追いかけているとやっぱりクリエイティブさはなかなか出てきません。スコアをつけないで、今回は右へ打ってみようとか、今回は左へ打ってみようとか、よし、今回はチョロしてみようとか、そんなことをやりながら、こうすればチョロするんだとか、こうすれば右に行くんだとか、こうなれば左に行くんだというのが自分で分かると非常に面白くなっていくのかなと思います。多くのアマチュアの方は、いつも真っすぐ打とうとして、なぜ右に行ったんだろう、なぜ左に行ったんだろうということばかりなんですよ。原因が分からないまま自分であれこれ探すということなんですけれども、敢えて右や左に打ってみて、どうすれば行くのか、どうすれば行かないのかということが分かってくると、もっともっとゴルフの幅が広がるのかなと思います。

多くの方がスコアをつけています。スコアをつけるゴルフしかやらないんです。そのくせルールは真面目にやらないんですよね。正確なルールを覚えてもいません。スコアをつけるということは、ルールどおりやらなければいけないんです。スコアをつけているにも関わらず、「まあ、その辺からでもいいんじゃないの」ということが起こること自体が本来は駄目なんですよ。やる以上はきっちり。そうじゃないんだったら、「もうその辺からでもいいんじゃない？オーケーだよ」というのであれば、みんなスコアをつけないでもっと気楽に楽しくやればいいじゃないですか。いろんなことをやってみればいいじゃないですか。

私は、妻とよくゴルフをやるんですけれども、妻とやるときは、私はほとんどグリーン上ではパットしないんです。ティーショットを打って、セカンドを打ってグリーンに乗れば、そのボールはぽんとエッジのほうに打って、ピンじゃないほうに向かってアプローチを練習します。それでは当然スコアなんかつけられないですよね、ホールアウトしていないんですから。でも、いろいろなことはできるし、非常に楽しいですよ。

―― 奥様はお上手なんですか。

いやいや、100を切るぐらいです。

―― ゴルフ界のレジェンドと100を切るぐらいの奥様も一緒に楽しくプレーができると。

そうなんですよ。妻は妻で勝手にやっていますからね。うまい人もそうでない人も一緒に楽しめるのがゴルフの魅力のひとつです。

―― 練習場でのアドバイスもお願いします。

練習場では、いつも同じ方向に打たないことです。同じ方向にただ単に打っていると、だんだん慣れてきていいショットが出るんです。だけど、そんなことはゴルフ場ではない

んです。１回しか打たないから。練習場ではいいけれどもゴルフ場に行くと駄目というのはそういうところにあるわけです。だから、一球一球方向を変えたり球筋を変えたりということがちゃんとできないと駄目なんですよ。

東京2020オリンピックについて

―― コロナで東京2020オリンピック・パラリンピックが1年延びて、今年もちょっと開催が微妙な状態になっていますが、オリンピックの強化委員長をされているのですね。

試合の１か月前のランキングでオリンピック出場選手が決まるので、強化委員長と言いながらまだ具体的には動けていません。今男女８人ずつの強化指定選手というのがいて、強化指定選手になると練習環境が非常によくなるんです。ただ、松山英樹君なんかはアメリカに行っているので、強化指定選手になろうがなるまいが全く関係ない。強化指定選手がオリンピックをやるゴルフ場をずっと回れれば当然地の利はあるんですけれども、これは規定上できないんです。

―― 日本で開催されるにもかかわらず、地の利は余りないんですね。しかも、1か月前に決まってそこからというと、何ラウンドも練習できるわけじゃないですよね。

ゴルフの場合は、８時のスタートと11時のスタートで芝の状態が全く違うし、１か月前の芝の状態と１か月後の芝の状態は全く違うので、そういう意味でもあまり地の利はないですね。今我々強化委員ができることはデータ集めです。例えばグリーンの起伏を５ミリ単位で全て測るとか、開催時期が７月の終わりなので朝との寒暖差や風向き、湿度、そういうもののデータを取って、この時期だと飛びやすいとか飛びにくいとか。そういったデータをどう使うかは最終的には選手が考えることなので、こんなの要りませんという人もいれば、これを見てもっと分析してこうしようとか、もっとこういうデータはないのという選手もいます。

弁護士・弁護士会へのメッセージ

―― 最後に、弁護士・弁護士会に対して何かメッセージをいただければと思います。

私たちは弁護士の方々との付き合いが非常に多くて、PGAで第三者委員会を立ち上げる際もいろいろな勉強をさせてもらいました。弁護士会に相談に行って、実は第三者委員会を立ち上げたいと話をしたら、じゃあ我々でやりましょうと言っていただいて、第三者委員会を立ち上げて大変ご協力をいただきました。

それから、弁護士の方々というのは、当然のことではありますが、我々の依頼した弁護士は我々の味方、相手の弁護士は敵なんですよね。これは職業だからしょうがないですよね。我々のことを考える弁護士と相手のことを考える弁護士ですから全く別のことを言うのは当たり前です。でも、例えば我々が理事会で話をすると、「弁護士、何て言ってるの?」とみんな聞くんですよ。弁護士の方々が言うことがいつも正しいと思っているんです。でも、場合によって、立場によってはそうじゃないでしょう、ということも最近分かってきて、そういう意味では、弁護士の方々と付き合う方法が分かってきました。また、そういうことを分かっている我々に対しては非常にいいアドバイスをしていただけるということで、すごくいい付き合いをさせてもらっていると思っています。

最後に、ゴルフは健康に良いスポーツですから、弁護士の方々も是非プレーしてください。

―― 本日はお忙しい中、長時間ありがとうございました。

（インタビュアー：江口陽三　望月康平　豊島健司
写真撮影：高広信之）